

技術・家庭科[家庭分野]

伊藤 圭子・浦上千歳

I はじめに

本年は、『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造』をテーマに設定して2年目となる。昨年は、本校が考える『グローバル時代をきりひらく資質・能力』の捉えにある、主体性・多様性・協働性を育む授業の提案を行った。日本と共通する伝統文化を持ち、発展途上国に住むモン族との交流を最終目標として、その学習過程にお互いの文化を知る学習やものづくりを組み入れた。この学習は、生徒の主体性・多様性・協働性を高める授業となった。また、授業において“ものづくり”を完成ありきではない新たな視点から取り入れることが、主体性・多様性・協働性を高めることに有効であることが明らかとなった。

次期学習指導要領の改訂では、「育成すべき資質・能力」の明確化が議論され、現行学習指導要領の課題を踏まえた目標の在り方を「実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、それらに係わる技能を身につけるとともに、生活の中から問題を見出して課題を設定しそれを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする態度等を育成する」としている。さらに、「家族・家庭、衣食住、消費や環境などに係わる生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」を「生活の営みに係わる見方・考え方」として整理し、学びの過程では、この「見方・考え方」を働かせつつ、生活の中での様々な問題の中から課題を設定し、その解決を目指して解決方法を検討し、計画を立てて実践するとともに、その結果を評価・改善することと述べられている。(教育課程部会第98回配付資料から「現行学習指導要領の成果と課題を踏まえた家庭科、技術・家庭科の目標の在り方―論点整理―」、2016年6月28日、p.224～p.230)。

グローバル化や情報化等の変化が加速度を増す中で、社会状況の変化はめまぐるしい。また、社会的変化の影響が、社会生活そして家庭生活に大きな影響を及ぼしている。そのような中で、子どもたちが生活を営む上で、何を身につける必要があるのかを明確にすることは大変重要である。家庭科での学びを通して「何ができるようになるのか」という観点からこれからの家庭科教育を考えていく必要がある。そこで、家庭科教育の核とも言える生活者の視点を大切に、自立した生活者として生活上の課題を解決する実践力の育成を目指す。具体的には、本校において総合的な学習のまとめとも言える SMART (修学旅行) に焦点を当て、家庭的視点から課題発見、協働的問題解決する授業デザインを考えることとした。

II 本年度の研究計画

1 研究の目的

自立した生活者育成のための協働的問題解決の授業デザインの視点を提案する。

2 研究方法

- (1) 先行研究などから、課題発見のための様々な授業法を整理する。
- (2) 授業実践時における生徒の活動・記述から協働的問題解決の過程を検討する。

3 研究会当日の授業

中学校3年生を対象に、総合的な学習の集大成として本校で実施している SMART (修学旅行) と家

庭科を融合した授業をデザインした。7月に終えている SMART を家庭科的見地から振り返り、生活者としての課題発見および解決・発信までの一連の授業を組み立てた。本時は、その一連の活動の中で、既習の家庭科での学びが生徒の実経験に寄り添って再構築された知見を活用し、来年度同じ SMART を実施する後輩および教員に対して、SMART で失敗しないための提案として発信する場面となる。